「支えあって生きていく」　　坂井市立丸岡南中学校　３年　相澤　七瀬（あいざわ　ななせ）

私には体の不自由な家族がいます。それは祖母です。私は祖母が大好きです。祖母の作る料理は、どれも最高においしくて、私が困っていたらいつもアドバイスをくれる、そんな祖母が私の自慢です。

そんな祖母は私が生まれるずっと前から脳の病気のせいで、右半身がうまく動かせないのです。だから歩くときも杖を使い、右足をかばいながら移動します。包丁を使うときも麻痺した右手で猫の手をつくり、固定させ、左手で包丁をもち、上手に切っている姿は子供心にも、

「すごいなあ。右利きの私には到底できないなぁ。」と思っていました。これは後々聞いた話ですが、祖母は元々左利きだったそうです。

でも今は年をとったことや病気で何度か入院したことがあり、前よりも体力が減り、できることが少なくなってしまいました。家の前にあった綺麗な花や野菜はなくなり、廊下やトイレ、お風呂など家のあちこちに手すりがつきました。スロープができて、祖母は転ぶ心配が減り、移動が楽になったようです。でも家がバリアフリーになったのを見て私は、体がだんだん不自由になっていく祖母を実感し、怖くなりました。もうすぐ祖母はいなくなってしまうのではないか。寝たきりの生活になったらどうしよう。祖母の家に行くたびにそんな事を考えるようになりました。

やがてコロナウイルスが世界中でまん延し、私は祖母と会うことも、家に行くこともなくなりました。会えなくなるのは寂しいですが、正直ホッとしていました。なぜなら、段々と弱っていく祖母を見るのは辛かったからです。そして会うたびに良くないことを考えてしまうのが嫌だったのです。

そしてコロナがやっと落ちついてきた頃に前々から計画していた鯖江のつつじ祭りに行くことになりました。

当日、車の荷台には車椅子が積まれていました。以前は旅行や買い物に行くときも、杖を使っていたので、車から降りるとき、車椅子に乗り移る姿を見て、体が確実に悪くなっているのを実感してとてもショックでした。ですが、私が想像していたよりも楽しそうに車椅子に乗ってつつじを眺めている姿を見て安心しました。

しばらく散策していると、つつじがよく見える坂道がありました。私はどうしても祖母をその場所に連れて行ってあげたくてはりきって登り始めたのですが、祖母は私よりも体重が重く、思っていたよりも坂があり、車椅子が思うように動かせず困っていると、後ろを歩いていた女性が、

「大丈夫ですか。手伝いましょうか。」

と声をかけてくれました。私達はその人に手伝ってもらい登りきりました。私と祖母がその人にお礼を言うと、

「大丈夫ですよ。気にしないでください。」

とその人は言ってくれました。

その時私は、自分がいかに愚かな考えをしていたのか思い知りました。困っている人がいたら助ける。人は支え合って生きるものです。人は皆年をとります。祖母が段々と不自由になっているのならば、祖母の新しい生活様式を受けいれて、支えることこそが私にできる最高の孫孝行なのではなのでしょうか。中学生の私にできることは、ほんの少ししかありませんが、車椅子を押してあげること、メガネを取ってきてあげること、そして何より会話をすること。祖母の支えになることは色々あると思うのです。

祖母はいつも私に寄りそい支えてくれました。今度は私の番です。人は皆支え合って生活しています。その中で、私も支えたり、支えられたりしながら、大人になっていきたいと思います。